

「障害者の 生涯学習」から、 “みんな”の 学びの場へ

—「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」
Shall We?レポート

2026/05/01



Learn by Creation

NAGANO

「障害者の生涯学習」から開く、 “みんな”の学びの場づくり

文部科学省「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」として、Learn by Creation NAGANOとNPO法人リベルテが文部科学省と共に主催。

障害者の学びの場を増やすためには、彼らに最適な場を用意するよりも健常者も混じり合った場をつくることから始まるという仮説のもと、「誰もが一緒にやりませんか」と声をかけあえるイベント Shall We? を開催いたしました。

来場者:約200名

開催日: 2026年 3月28日 10時~17時

場所:サントミュージゼ 1F 多目的ルーム&和室

協力:上田市立美術館

後援:長野県、上田市、長野県教育委員会、長野県社会福祉協議会、上田市教育委員会、上田市社会福祉協議会

主なプログラム:

映画『うえだのまなざし』上映、カフェ、ラジオ、岳の織制作WS、全国各地の取り組みの展示、見えないスポーツ図鑑

▶ [レポートの詳細はこちら\(note\)](#)



Shall We?

やったり、
見たり、
いたり、
ぬけたり。

それは、言葉も身体も違う私たちが、ただ同じ空間に「共にある」ことを遊んでみる合言葉。混ざって何かをやるのも、見ているだけでもただいるだけでも、そしてその場を離れることも自由な「共生」の実験。カフェで淹れる側になったり、飲む側になったり。目の見えないスポーツで身体のスレを面白

がったり、映画や祭りの記録をぼんやり眺めたり。ラジオでお喋りしたり、ワークショップに途中まで参加してみたり。「する人」と「してもらう人」の境界線もなく、それぞれのテンポで、そこに「居る」ことを楽しむ一日。大人も子どもも、ふらっと迷い込みに来てください。

2026年 **3月28日** (土) 10時から17時まで 入場無料/入退出自由

会場 **サントミュージゼ** 1F多目的ルーム & 和室

プログラムに参加希望の方へ ※会場にはカーンダウンスペースもございます

 筆談ボード あります	 車椅子可	 多目的トイレ あり	 プログラム 開催中の入退場可	 声を出してもOK	 補助犬 OK	 ゆずりあい 駐車場あり	 手話通訳者が います
--	---	---	--	---	--	---	--

共催: 特定非営利活動法人リベルテ
協力: 上田市立美術館
後援: 長野県、上田市、長野県教育委員会、長野県社会福祉協議会、
上田市教育委員会、上田市社会福祉協議会
問い合わせ先: lcrcnagano@gmail.com (後々赤・青・和)

文部科学省
MINISTRY OF EDUCATION
CULTURAL, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Learn by Creation NAGANO

誰でもゲストで パーソナリティの 「余白ラジオ」

会場の中央テーブルに機材を配置し、トークセッションを公開ラジオ収録の形式で実施。プログラムの合間には、その場にいる来場者に声をかけて即興の番組も収録した。

登壇者：小林成子(上田市教育委員会)、南信乃介(繁多川公民館)、首藤芝乃・秋田乃梨子(Happy Universal College)、井口啓太郎(国立市公民館)、志々田まなみ(国立教育政策研究所)、福澤信輔(長野県社会福祉協議会)、野村政之(信州アーツカウンスル)、小川泰生(長野県社会福祉事業団)、森真理子(厚生労働省)、大井光世(長野県立美術館アート・コミュニケーター)、三好大輔(映画監督)、直井恵(うえだ子どもシネマクラブ)、石坂恋子(演劇活動家)



今回のコンファレンスの目玉が、会場中央のブースで常時開催される「ラジオ」であったかと思う。各60～120分ほどのセッションで、長野県や全国の関係者が登壇して語るという企画である。イベント会場のようなザワザワしている会場で、遮音のブースも無い中、なぜラジオ？と思っていたのだが、セッションによっては多くの人対面して聴き入っていたほか、周囲に座ったり立ったりして聴いていた人も多く、非常に意義の大きい企画であったように思う。手作り感のある「ラジオブース」のデザインもとてもよかった。

医療法人稲生会 土島智幸さん

ラジオがこうして開かれているのが面白い。ラジオがあると喋りやすい。

参加者

はたらく やすむ 気にしない カフェ

上田市内の福祉事業所NPO法人
リベルテスタッフがサポーターと共に
運営したカフェ。来場者は客として
休憩するだけでなく、自らコー
ヒーを淹れる店員として参加する
こともできた。

コーヒードリップ体験のサポーターをして
みて。とっても楽しくできてよかった。いっ
しょに教えてた男の子がとっても意欲的に
やってくれてとっても嬉しかったし、楽し
かった。

ドーっと疲れが出てしまったけど、楽しかつ
た。

MoRoさん・リベルテ

コーヒーをたくさんの人に飲んでもら
ったり、コーヒー豆をひいてもら
ったりして喜んでもらい自分は嬉しかった。

ドライさん・リベルテ



カフェ

はたらく、やすむ、気にしない。

リベルテを知っていて来てくださった方、リベルテを知らない方、コーヒーの香りに誘われてふらっと立ち寄ったというまちの人たちにメンバーが教える機会と、コーヒーがゆっくりしみ込んでいく空間とを共有できた特別な時間でした。

リベルテスタッフ

土曜日の日はとってもおもしろかつた。よく仕事ができたとし、また参加したいと思いました。

清野さん・リベルテ

サントミュージゼでカフェの
仕事して、お客さんや知
合いの人もいて、やっ
てみてよかった。

サントミュージゼの中でカ
フェをやれてよかった。ま
たサントミュージゼで出張カ
フェやってみたくです。勉
強になりました。

AiKAさん・リベルテ

上田のみんな上映会

地域の8mmフィルム映画『うえだのまなざし』上映、終了後には鑑賞者と監督との対話。映画にも登場する子どもたちによる音声ガイドの制作の話や、上田市の変遷など話題は多岐に渡った。また、上田市外からの参加者も多くいた。

「上田のまなざし」の映画を目当てに立ち寄った。ロトスコープ体験が面白かった。

参加者

イベント告知で知り、見るのを楽しみにしていた映画「うえだのまなざし」でも、大いに希望を見出すことができた。この映画は「上田の人のために制作された映像の世紀」だと感じた。私は上田市民ではないので、わからなかったところがいくつかあったのだけれど、上田市民ならば全編を通して感動できたのだろう。自分が上田市民でないことを心底、残念に思った。

環境省中部環境事務所 加藤篤さん

ロトスコープ ワークショップ

トレース紙に描いたみんなのイラストを組み合わせ、アニメーションをつくるワークショップ。

異なるタッチが生む独特の動きのアニメーションはYoutubeにアップロードされている。

<https://youtu.be/2esJC3LtZjM?si=dbQd4y9ielF3NQAG>



「上田のまなざし」の映画を目当てに立ち寄った。ロトスコープ体験が面白かった。

参加者



岳の幟制作ワークショップ

NPO法人リベルテによる、上田市で500年続く祭りに使われる岳の幟を制作するWS。裂いた布を竹笹に巻きつける工程は、知らない人同士でも隣り合った人々が協力する必要がある。昨年11月の「みんなの祭り」と同様、好評を博した。

「たけのぼり」の制作を見学していた際、隣に立っておられた初老の男性から、たけのぼりに関する伝統や長野オリンピックの開会式で使われたといったお話を伺うことができた。その男性は油絵が趣味で、隣の会場で開催されていた展示会に来られていたとのことだったが、「隣で何かやっているな」と思って会場に入ってみたということであった。ここでも、「教える側(主催者)／教えられる側(来場者)」という関係性ではなく、「教える側(来場者)／教えられる側(他の来場者、というより障害者の生涯学習アドバイザーという立場としてはどちらかという主催者側)」という関係性への転換がなされていたことになる。

医療法人稲生会 土畠智幸さん

別所のお祭りの笹の幟も実際に作ってみて、今年はこのお祭りに行ってみよう！と思いました。

それで、こうした体験を地域の視覚障害のある仲間たちが、もっとできるといいなあと思いながら帰ってきました。

盲導犬と一緒に参加したHさん

「みんなの祭り」展示

2025年度「障害者の生涯学習」事業としてLearn by Creation NAGANOとNPO法人リベルテで取り組んだ「みんなの祭り」の展示。ヶ月にわたる祭りの準備と当日の様子を30分ほどの映像作品や、8パネル展示や報告書などで来場者に伝えた。

「確かに祭りをきっかけに繋がりが生まれて、防災でも生かされるっていうのは、そうかもしれないって、今回これを拝見して気づいたことです。」

とくに学びがあったのは、「みんなの祭り」プロジェクト。祭りの準備実行を通して培われるコミュニケーションが、地域のつながりを生み、ひいては防災につながるという視点は新しかった。一人暮らしを始めて以来、有事の際に人に頼れるかどうかは大きな関心事。さいわい、府中にはくらやみ祭りなど、大きな祭りもある。これからは平時の備えも含め、もっと関心をもってみよう。

東京から参加した障害当事者のKentaroさん

信州アーツカウンシルの採択団体として本イベントを知った。過疎地域で地縁を作るための「祭り」づくりに関心があり、事例として参考になった。

参加者

さわって、ズレて、エラーして ゲームコーナー

視覚に頼らずに柔道や野球、フェンシングを体験する「見えないスポーツ図鑑」や、複数人で指同士を棒で繋いでバランスを保つ協力型ゲーム「YUBIBO」を実施した。

「見えないスポーツ図鑑」は、伊藤 亜紗:東京工業大学 リバラルアーツ研究教育院 環境・社会理工学院准教授 博士(文学)、渡邊 淳司:NTT コミュニケーション科学基礎研究所 人間情報研究部 上席特別研究員 博士(情報理工学)、林 阿希子:(出版時)NTT サービスエボリューション研究所 2020エポックメイキングプロジェクト 研究主任 の3名によって制作された作品です。本展示では、伊藤亜紗さん、渡邊淳司さんに監修いただきました。

出身:長野県外

イベントを知ったきっかけ:関係者からの紹介

所属:社会教育関係・福祉関係

印象に残ったプログラム:ゆびぼー、のぼりづくり

感想:楽しかったです。自分の日常生活ではなかなか出会わない情報にふれ、刺激を受けました。

参加者アンケートフォームより

シャルウィは、とっても興味深かったです!

中でも、フェンシング、野球、柔道の動きを体験するゲームは、初めて体感して、新鮮な驚きでした。

盲導犬と一緒に参加したHさん

いずれも、体のどこかを使って「触れる」体験、もしくは、木の棒や「たけのぼり」などの媒介物を通して他者と「(間接的に)触れる」体験をするという内容であった。SNSの普及や、コロナ禍を経て、オンラインでも様々なコミュニケーションが可能となったが、「触れる」という「身体性」を用いたコミュニケーションの意義はむしろ以前より増していると思われる。体験ブースによっては障害当事者がやり方を教えてくださるところもあり、「障害の有無」ではなく「経験の有無」によって「教える側/教えられる側」の役割が決まるという企画のデザイン

医療法人稲生会 土畠智幸さん

混ぜていたりいなかったり展

県立長野図書館による
バリアフリー図書の体験
展示をはじめ、パネル展
示ではっぴーの家ろっけ
んによる「Happy
Universal Collge」、
国立市公民館、那覇市繁
多川公民館、長野県西駒
郷アトリエ「風と太陽」、
信州アーツカウンシル、
上田市生涯学習課など、
日本全国のさまざまな
社会教育の形を紹介し
た。

LLブックを初めて知ったという大学
関係者の方が「バリアフリー図書と
アートは近い存在だと再確認できた。
アーティストや地元の美術館と連携し
て取り組みたいと思った」と感想を
伺い、1冊の資料から未来への広がり
を感じた。

一人当たりの滞在時間が長く、熱心
に図書について質問される方や点字
器・ルーペ・オーディオブックを「こ
の機会に試してみたい！」と体験され
る方が多く、「読む」ことをサポ
ートするツールへの関心の高さを感じた。

想像以上に多くの方がバリアフリー図
書を手に取ってくれた。

お子さんの訪問も多かったが、中
には展示資料や点字器等に興味津々で
職員に質問し、次々と体験する子
もいた。

学校などにもっとバリアフリー図書を
周知して欲しい！など様々な質問・ご
意見・ご感想をいただき、今後の取
り組みの参考になった。

会場内に置かれたホワイトボード(感
想など自由に書くスペース)に「点字
を打つのが楽しい」と書かれていた
が、点字体験に再訪される方もみら
れた。

イベントの在り方や会場など やったり、 見てたり、 いたり、 ぬけたり

上田市在住の視覚に障害がある元職員を誘ったところ、どんなスケジュールですか？席は決まっていますか？等聞かれたが、講演会形式と違い自由度が高いイメージを伝えると、気楽に参加できそうですね！と、ヘルパーさんと来場され、ゲームや集まった人と会話を楽しんでおられました。後日、参加して良かった！とても楽しかった！ゆるく参加できるところがいいですねと感想をいただきました。

時間に縛られず、自由に入ったり、皆が「やったり、見てたり、いたり、ぬけたり」という空間を楽しんでおられる様子がとても印象的でした。

盲導犬、乳幼児～高齢者、一人でふらっと、家族や友人と、関係者もヘルパーさんもみんな「共生」&「参加者」でした。とても素敵なプログラムにお誘いいただき、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

あらゆるプログラムを予約不要、いつでも参加可能、退場自由という形式で実施。イベント説明でもあえて「障害者」という言葉を使わなかったが、来場者の半数近くは障害当事者の方(推定)。

(文科省のサイトではコンファレンス)かたっくるしい説明が為されている。が、実際に行ってみると、そのような印象とは真逆だった。出展者も参加者も区別なく語り合う空間が形成されていて、〈説明する・される〉という関係性が、意識的に崩されているように映った。紹介されている各事業や取組も、〈障害者のために〉行われているものではなく、〈みんなのために〉行われているものが、結果として障害のある人も包摂している、という性質のものが多い。

東京から参加した障害当事者の
Kentaroさん

一つの(そんなに広くない笑)会場にあんなにたくさんのモノやコトが混在していて、人生観変わりそうです～わたしけっこう鎧をかぶってたんだなどの気づきです初めての方とたくさん話したし、体験コーナーもほぼ網羅しました笑笑。よき企画をありがとうございました。

上田エネルギー理事長の藤川まゆみさん



医療法人稲生会

文部科学省障害者の生涯
学習推進アドバイザー

土畠智幸さん

賑わいを生む空間デザイン

会場の空間デザインはもちろん、各企画のデザインについても非常によく練られたものであると感じられ、アート系やコミュニティデザイン系の団体が企画の中心を担っていた意義が大きかったと考えられる。多くの人が来場され、ラジオブース前に座っている人が多い時間帯などは会場が狭く感じられることもあったが、むしろその「狭さ」が「賑わい」を演出するという意味で有効であったように思う。

他者に触れるコミュニケーション

会場の「狭さ」と「賑わい」は、必然的に「うるささ」を生む。加えて、今回の中心的な企画であった「ラジオ」でスピーカーを通して音声を出力することは、その「うるささ」をさらに増すことになる。ただ、その状況の中でも、会場内の来場者同士が自由に会話をすることが許されているのだが、会話をする際に必然的に互いの「距離」は近くなる。通常であれば「うるささ」は会話の支障になるのだが、「距離」が近くなることで「関係性」はつくりやすくなるという良い意味でのパラドックスが生まれる。前述の通り、体験ブースでは「何らかの媒介物を通して、他者に(間接的に)触れること」が生み出されていたが、会場のあちこちで「言語的コミュニケーションを通して、他者に(間接的に)触れること」が生まれていた。

「触れる」から共生へ

今回のコンファレンスのテーマが「やったり、見てたり、いたり、ぬけたり。」であり、チラシには「言葉も身体も違う私たちが、ただ同じ空間に『共にある』」「混ざって何かをやるのも、見ているだけでもただいだけでも、そしてその場を離れることも自由な『共生』の実験」とある。今回の「実験」により見出されたことのひとつは、「場のデザイン」によって他者と「触れる」現象が多く生み出され、それによって障害の有無や立場によらない「共生」が生まれる、ということだと感じた。

今回の「実験」を「共生社会の実現」につなげるための一つの鍵は、コンファレンスのようなイベント時だけでなく平時に「他者と(間接的に)触れる」現象を多く生み出す「場のデザイン」をどのように空間的に落とし込むかということであろう。

文部科学省が全国で開催する「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」についても、イベントではなく「空間的な場のデザイン」を意識した実践や研究が増えることを期待したい。



全体を振り返って



那覇市繁多川公民館

南信乃介さん

イベントコンセプトについて

「いるだけでいい」という感じがすごくよかったですね。

空間デザインについて

ほどよく密集していて、いい意味では全体を感じながら、ある意味では情報過多だったのではないのでしょうか。もう少し、広く使えると程よい感じはしました。ラジオと遊びコーナーを少し離してもいいかもしれません。

各プログラムについて

常に何かが動いていて、ゆるゆると出会いとコミュニケーションがとれる最適なプログラムだったのでは。

障害者の生涯学習の推進(社会教育)という観点から見て

気づきとしては、ごちゃまぜにある、という状態がすでにそれを成立させるコミュニティとなっている。混ぜようと思ったら混ぜ続けるといけない。つまりごちゃまぜになった状態に加え続けることが多様な場を作ることに繋がっている。**社会教育はそういったコミュ**

ニティづくりに最適なアプローチのひとつだと思うが多様な場を生み育て突き抜けていくためには、そこにいる人が重要で心揺さぶる出会いと別れがそういった人を育て続けている。

意外とありそうで無いのが突き抜ける場の、懐の深さ。ともに生きる、生き生きが伝わってそれが生み出す信頼。

すでに動き始めたごちゃまぜコミュニティという場を活かした地域づくり、ますます面白くなりそう。

全体を通して感じたこと、考えたこと など

いろいろな方とたくさんお話ししました。

長野での普段の皆さんの活動をもっと知りたいなと思いました。





長野県立美術館
アートコミュニケーター

大井光世さん

ソフトな隔離、分離としての自立

今回の「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」において、「Shall we?」としたことはとても大きな意義があると思います。

近年こうした動きが活発化して全体的に受け入れられるようになってきましたが、それまでは障がいのある人の社会的自立やインクルーシブのための自立訓練というように、分離して徹底的にマジョリティに馴染むための練習をしていました。

それはどこか障がいのある人が積極的に生きるためというより、周囲に迷惑がかからないためという非常にソフトな隔離対策のように感じていました。

仕掛けあう、受け取りあう、誘いあう＝共にある

「共にあること」とはどういうことなのか。

それは一方通行な行為のやり取りでもなく、役割分担でもありません。お互い行動を仕掛けることもあれば、受け取ることもある。そこに明確な線引きはなく、ごちゃまぜでグラデーションな世界。「Shall we?」と緩やかに誘われることは役割を振り分けられることではないからこそ、障がいの有無に関係なくすべての人が安心して過ごすことができると思いました。

私たちは学びあえるか

空間デザインについては、様々な取り組みが仕切りがなくふらっと立ち寄ったり、入ったり、眺めたりと物理的にできるのがとても良いと思いました。コンテンツも多岐に渡っていたので、年齢や状態に関係なく触れることができました。

障がい者の生涯学習を考えるとということがどれほどあったか。これを思い起こすと、思い当たることは少ないと感じました。それだけ学校という制度を卒業した途端に、障がい者が生活において生きる活力となる文化や社会に触れる機会に対する合理的配慮が足りなかったのではないかと思います。

障がい者の社会教育というのは、ただ障がい者が学ぶ立場になるだけでなく、障がい者が持つ文化的スキルや社会的スキルを多くの人が学ぶことができるという機会になり得ると考えています。



がっかりからの気づき

当日、私は「見えないスポーツ」のアルファベットフェンシングを、視覚障害のある方と一緒にやりました。内心「見えないスポーツなのだから、見えない人とならシームレスに、対等に楽しめるはずだ」と思っていました。しかし実際には、文字を選ぶにも、相手が何を選んだかを確認するにも、見える私には必要のないステップが彼女には必要でした。私は少し、がっかりしました。

そのがっかりはすぐ、別の気づきに変わりました。「違いが消えた先に特別なものがある」という期待。それ自体がすでに「できる／できないの違いを消せばよい」という思い込みだったのかもしれませんが。頭では「障害は多様だ」とわかっている、実際に一緒に何かをやってみるまで、その思い込みこそが私には見えていませんでした。

「改善」を決めるのは誰か

2011年の改正障害者基本法は、障害の原因を社会の側に置いた大きな一歩でした。しかしそれが設備やシステムの改善に注意が向けられその実現が不十分である限りは「責任が取れないので」積極的に障害者を受け容れられないという声も上がるようにもなりました。また、障害者と呼ばれてきた人々と一緒に考えずにこの改善を進めることも「できる／できないの違いを健常者の論理で消す」ことになってはいないかという疑問も浮かびます。つまり、改善の方法そのものを誰が決めているかという問いです。

その問いに答えるためには、まずは共にいる経験がベースになるのではないのでしょうか。一緒にいたことのない人の「障害」を考えることは、誰にもできないはずですから。

最初の一步

とすれば、最初の一步は、共にいる経験を少しでもつくることではないのでしょうか。講座の予約を本当に必須にする必要があるか。盲導犬と来ることを想定していると、チラシのどこかに示せないか。そういった見直しの積み重ねが、これまで不可視化されてきた人々との最初の「触れ合い」を生み、共にいることに馴染んだ先に初めて「何が障害なのか」を一緒に考える機会がやってくるのだと思います。

障害者の生涯学習は、障害者だけを学び手とする必要はありません。健常者もまた、モノや遊びを介して互いの身体の違いに直面し、気づき合う——そういう双方向の学びがあり得ます。いわゆる社会教育こそが、その土台だと私たちは今更ながらこのイベントを通じて実感しました。

答えを持たずに始めたこのイベントに、200人が来て、触れ合い、混ざり合いました。しかし「できる／できない」にかわる「共にある」が何なのか、私たちはまだ充分には知りません。だから一緒に作りながら考えてみませんか。

Shall we?

Learn by Creation NAGANO 実行委員 千々和淳

Shall we?